

# 浄土

monthly JODO

2014  
July-August  
78



法然上人鑽仰会

蓮

門

句

会

勝崎裕彦

(東京新宿・香蓮寺)

確かめて母のしきたり盆支度

盆棚へ添えるひと品我が心

海施餓鬼無縁諸尊はるかなり

山崎龍道

(天草熊本・遣迎寺)

魂棚やせめて一言語れかし

自転車の若き僧行くお盆かな

仏壇の遺影幼き盂蘭盆会

行正明弘

(福岡糸島・正覚寺)

郷訛乗せて混みあふ盆列車

巡錫の島の蜚路地盆の月

萎えし掌を掴み拝みの生身魂

佐山哲郎

(東京根岸・西念寺)

屋上にいま迎へ火を焚く少女

酌み交はすお次はどなた盂蘭盆会

手花火のやがてさみしき送り盆

# 浄土

2014/7・8月号 目次

|                  |      |          |    |
|------------------|------|----------|----|
| 新連載 法然上人のお言葉④    | 梶村 昇 | 英訳 河西良治  | 2  |
| からだでする念仏としての坐禅   |      | 藤田一照     | 4  |
| 会いたい人 中森貫太さん (下) |      | 関 容子     | 12 |
| 響流十方             |      | 小村正孝     | 22 |
| 連載小説 渡辺海旭        |      | 前田和男     | 26 |
| 友好の絆             |      | 森 清鑑     | 34 |
| 誌上句会             |      | 選者＝増田河郎子 | 44 |
| マンガ さっちゃんはネッ     |      | かまちよしろう  | 47 |
| 編集後記             |      |          | 48 |

表紙・【花写】芝崎純子 陶芸家 浅井竜介 撮影 keizo.S

表紙裏・蓮門句会

背表紙裏＝泰雲の美味探訪



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

## ご法語

善人な<sup>もつ</sup>お<sup>もつ</sup>以て往生す、況や悪人をやの事。<sup>くでん</sup>口伝これ有り。

(醍醐本『法然上人伝記』)

現代語訳―善人でさえ極楽に往生できる、まして悪人はなおさらできるという事。こういう口伝がある。

## 解説

これは『法然上人伝記』という、上人没後30年(1243)に編纂された「最初の法然上人全集」に出てくる言葉です。ところがこの写本が発見されたのは、編纂してから675年後の大正6年(1917)、京都の真言宗の大本山醍醐三寶院の宝蔵からです。それで『醍醐本』といわれるのですが、なぜこのようなことになったかといえは、お

### Honen Shonin's Sayings

Even the good could attain their birth in the Paradise, so the bad could do so all the more. This was passed down to posterity orally. (from *Daigo Edition of the Biography of Honen Shonin*)

### Commentary

This saying appears in *the Biography of Honen Shonin*, his first complete work that was compiled in 1243, thirty years after Honen's death. This manuscript was discovered in a treasure house of Daigo Samboin, the main temple of the Shingon sect of Buddhism in Kyoto. The discovery was made in Taisho 6 (in 1917), 675 years after the editing. Then, it is called *Daigo Edition*, probably because this remark of Honen's was written down in this edition.

そらくこの言葉が記されていたからだと思います。

仏教は言うまでもなく「悪いことはするな、善いことをせよ」と教えますが、この言葉は、その逆を言っているようみえます。もしこれが当時の仏教界に聞こえれば、小さな法然教団などひとたまりもなく潰されてしまいます。そこで上人は、本当に浄土教の分かつている人だけに、この言葉を口伝として伝えました。それが記録されて残ったのが、『醍醐本』と『歎異抄』です。『歎異抄』も、これを法然上人の言葉として伝えているのですが、明治時代に、親鸞聖人（1173-1262）の言葉と読み違えて今日に至ってしまいました。

お互い自分を顧みれば、仏教の基本の教えである「戒律を守り、心を定め、教えの真意を知る」という三つのことさえ守れないことに気づかれます。それでどうして善人などと言えましょうか。その善人だけが救われるというのであれば、それを守れない悪人は、どうすれば救われるのでしょうか。

上人は長年苦闘の結果、阿弥陀仏は、一心に南無阿弥陀仏と称えた人を極楽に救いと誓っていることを知りました。教えを守れない悪人は、この阿弥陀仏の本願によって極楽に往生すればよいということです。換言すれば、悪人こそ浄土に往生できる人であるということです。

Needless to say, Buddhism teaches us "Don't do evil things. Do right things". Honen in the above quotation seems to have said the opposite of this Buddhist teaching. If Honen's remark had been overheard by the Buddhist community of those days, the small Honen religious group would have been destroyed irresistibly. Then, Honen delivered these words orally only to those who really understood the Pure Land Buddhism. The documents that put the words down in writing were *Daigo Edition* and *Tannisho*. *Tannisho* also passed them down to posterity regarding them as Honen's words. However, they were misinterpreted as Shinran Shonin's (1173-1262) in the Meiji era and, ever since, the interpretation has been handed down as such.

Reflecting on their own selves, all people notice that they cannot obey even the three basic Buddhist ways of practice namely, keeping the precepts for good behaviors, keeping the concentration of mind, and discerning the true intentions of Buddhist teachings. I can see no reason why such people are supposed to be good. If only these good people can be saved, how on earth can bad people who cannot obey the Buddhist disciplines find salvation?

After his bitter struggle over a period of many years, Honen realized that Amida Buddha had vowed that He would extricate and bring to the Paradise those who uttered Nam Amida Butsu with single-minded devotion. Amida Buddha's Vow is that, as to bad people who cannot observe the teachings, they are allowed to go to the Paradise by virtue of His Original Vow. In other words, it is bad people who can attain their birth in the Paradise.

## 梶村昇

亜細亜大学名誉教授

からだでする  
念仏としての  
坐禅

曹洞宗国際センター所長  
藤田一照

## 坐禅と念仏は相容れないものなのか？

一般的には、坐禅は「禅仏教の自力難行」、念仏は「浄土仏教の他力易行」とカテゴリ一的に分類・区別され、あたかも全く別物のように考えられています。さらにはそれだけにとどまらず、お互いに対極的・対立的な関係にあるとすら思われているので、坐禅人は念仏をすべきではなく、念仏者は坐禅をしてはならないといったような相互排他的な雰囲気さえ生まれています。とりわけ日本においては、どちらの伝統も「ただ坐禅」、「ただ念仏」をスローガンに掲げて、ひらすらその一つの行だけに依拠することを特に強調していますから、それ以外の修行は必然的に否定・排除される傾向があります。

たとえば、最近知り合いになった真宗の若いお坊さんは、仏教の坐禅や瞑想に関心を持つて熱心に学ばれています。が、「真宗の僧侶としてあるまじきことをしている」というまわりからのプレッシャーを陰に陽に感じているそうです。また、わたしは縁あって念仏のお寺をたずねたときは、そのみなさんといっしょに「なんまんだぶなんまんだぶ……」とお念仏しますが、そんなとき「えっ、禅宗のお坊さんがお念仏してもいいんですか!?」とよく言われます。

こういう妙に窮屈で堅苦しいことになってしまうのは、坐禅にしても念仏にしても、特定の宗派が独占している宗派的な行法であるかのように思い込んでしまい、宗派人として念仏をし、宗派人として坐禅をしているからでしょう。しかし、本来の坐禅や念仏はその

ような宗派根性を越えた、もつと深く広々したところで理解されなければならないのではないでしょうか。坐禅も念仏もそれを深めていったら必ず同じところで出会うはずだし、逆に言えば坐禅も念仏ももとは同じところから生まれてきた、いわば根を同じくする宗教的信行の二つの形態ではないのかということです。では、その「同じところ」とはどのようなところなのでしょう。それが明らかになれば、坐禅すればするほど念仏がありがたく受けとめられ、念仏すればするほど坐禅を深くうなずけるようになるでしょう。

### 念仏と坐禅を貫く一つのものはなにか？

わたしが深く敬愛している仏法者の一人である良寛さんは道元禪師門下の修行者としてずっと坐禅をしてこられたお方です。しかし、その良寛さんは同時に

「心もることばも遠くとどかねば はしなくも御名をとなえこそすれ」

「おろかなる身こそなかなかうれしけれ 弥陀の誓いにあうと思えば」

「草の庵に寝ても覚めても申すこと南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」

「わたしにし身にしありせば今よりは かにもかくにも弥陀のまにまに」

「良寛に辞世あるかと人間はば 南無阿弥陀仏と言ふと答えよ」

といった念仏の歌をたくさん残しています。それは、かれのなかでは坐禅と念仏がなんの問題もなく一つのものとしてとらえられていたからです。念仏するように坐禅し、坐禅するように念仏できた人だったのでしょう。坐禅と念仏がそのように当たり前に、たった一

つのこころの両面であり得るようなありかたとはどのようなものでしょうか？ そのようなおらかな宗教的信行の世界はどのようにしてわれわれの前に開かれてゆくのでしょうか？

わたしの法の上での祖父であつた内山興正老師（一九一二―一九九八）は、坐禅と念仏について「坐禅はからだでする念仏、念仏は口でする坐禅である」と表現されました。わたしは縁あつて坐禅修行者となつてからは、内山老師がそう言われた「からだでする念仏」に自ずと成つていくような坐禅へと深まっていきたいと願いつつ、これまで実参実究を続けてきました。ですから、普段の自分の行として「南無阿弥陀仏」を唱えるという、普通の意味での念仏の行者ではありませんが、坐禅を通して念仏を学んでいきたいと思つてゐる者です。

それは「坐禅と念仏」というふうに別なものを二つ並べてその関係を云々するということではなく、坐禅そのものがとりもなおさず念仏になつていくようなありかたを通して、念仏の心を学んでいくということです。

坐禅も素晴らしい、念仏も素晴らしい、だから両方を一緒にやったらもつと素晴らしくなるはずだという浅はかな考えから、坐禅をしながら同時に念仏もするというような中途半端なことではなく、純粹に坐禅という一行を深く掘り下げていくことが同時に念仏に深まっていくなことであるような学びの道がきつとあるはずだと思ふからです。

仏教には実にさまざまな行法が伝承されてきています。それらを表面的に眺めてみれば、

坐禪と念仏のように、一方は黙って坐っているし一方では口で何かを唱えているという具合に、まったく異なったバラバラな行法の集まりに見えるかもしれません。しかし、それらが仏法に則ったものであるかぎり、形態上の差異を超えて、ある共通のところから生まれてきた宗教的実践であるはずで、大乗仏教の場合、その「共通のところ」とは、内山興正老師の表現を借りて言えば、「思いで煮たり焼いたりする以前の生なまのいのちを事実としてすでに生きている自己が、その生のいのちをもって、今ここであらためて、生のいのちに帰り続ける（澄みきよまくなっていく）」ということになります。これを単なる理屈にとどめておかないで、事実「やる」実践として、われわれに坐禪や念仏が届けられてきているのです。

この実践を一言で表現するなら、それは「おが拌む」という営みになるのではないでしょう。しかし、それはわたしがわたしとは別の宗教的対象を向こうに立てて、それを拌むという普通の二元的な意味での「拌む」ではありません。どこまでも生のいのちが、生のいのちをもって、生のいのちを拌むのです。そのようにして、拌むものと拌まれるものが一つになった生のいのちがそこに現成します。これが「帰命（生のいのちが生のいのちに帰る）」であり「南無」ということです。キリスト教においても「神は霊なれば拌まじる者も霊と真をもつて拌むべきなり」（ヨハネ四の二四）と同様の意味合いのことが言われています。「神」と言い「仏」と言うのも実はこの「生のいのち」のことを指しているのです。ですから、洋の東西を問わず、宗教としての信行は、表現や形態は多種多様に異なってい

ても、煎じ詰めればこのような意味での、「拜む」Ⅱ「帰命する」Ⅱ「南無する」に尽きるのではないでしょうか。そして坐禅と念仏はそのなかでもっとも洗練された二つの拜む形なのです。だからこそ、それぞれ「仏道の正門」(道元しやうもん)とか「大行」(親鸞たいぎやう)と呼ばれるのです。

## 坐禅も拜み、南無する姿なのか？

念仏でお唱えする「南無阿弥陀仏」とは「帰命無量寿(不可思議光)如来」という意味ですから、それが仏Ⅱ如来Ⅱ「生のいのち」に帰命し、南無すること、つまり拜むことだというのはわかりやすいのですが、坐禅もまたそれと全く同じ意味でそうなのだというのは理解に苦しむかもしれません。しかし、道元禪師は「ただわが身をも心をも、はなちわすれて、仏のいへになげいれて、仏のかたよりおこなはれて、これにしたがひもてゆくとき、ちからをもいれず、ところをもつひやさずして」実現されるのが仏祖正伝の坐禅だと言います。これをそのまま受け取るなら、坐禅が「(わたしは)ちからをいれ、ところをついやして」悟りを目指して努力する自力の難行であるという一般の通念はあつさり捨てなければなりません。「すべてが仏の方からおこなわれて、(わたしは)それにしたがっていくだけ」なのですから、それはまさに「絶対無限の妙用に乗託する」(清沢満之)他力というべきだし、「ちからをもいれず、ところをもついやさない」と言われているのですからまさに「安楽の法門」(道元)の易行というべきです。こう見てくると、実は坐禅

は常識的理解とは大きく異なっており、まさに他力易行として理解され、またそのように行じられるべきものだったと言わざるを得ません。

ここで氣をつけなくてはならないのは、自や他、難や易を日常語ではなく「仏法語」として理解しなければならないということです。道元禪師は「しるべし。仏法はまさに自他を見をやめて学するなり」（『正法眼藏随聞記』）という非常に重要な原則を示されています。ですから、仏法で用いられる言葉、仏法語は自と他が二つに分かれたあとの相對・比較の世界（「思いで煮たり焼いたりした以後」）を超えた、自他不二の絶待・絶對の世界（「思いで煮たり焼いたりする以前」）を表す言葉として理解しなければなりません。つまり、ここで仮に「他」とされている「仏」も自分と区別され遠く離れたところにある、何か超越的な存在などではなく、今ここで直接に自分において働き自分を事実生かしている無量無辺の大自然の働きのことを指しているのです。これがさきほど「生のいのち」と呼んだものです。自と他が二つに分かれる以前の自他不二のところを仮に呼んで「他」と言い、それと同じように難と易が二つに分かれる以前の難易不二のところを仮に呼んで「易」と言っているだけです。あくまでもこういう仏法語の意味で「他力易行」を理解しなければなりません。決して、人間的な相對的尺度で自力か他力か、難行か易行かを比較して論じているわけではありません。

さて、坐禪においては「わが身をも心をも、はなちわすれて、仏のいへになげいれて」いくことと、「仏（『生のいのち』）のかたよりおこなわれて、これにしたがいもてゆく」

ことが同時同所で成り立っています。前者は自らの強為（意思的努力）やほからいによってなされる人間的業（わざ）を手放していくことであり、後者は表面的な自我意識を超えた自己の根源的姿（「本来の面目」）『生のいのち』がそこに活き活きと顕わ（あらわ）になっていくことだと言えるでしょう。念仏に引きつけて言うなら、前者は「南無」であり、後者は「阿弥陀仏」に当たります。南無することによって阿弥陀仏がそこに現成する、この二つが不即不離の関係でお互いを支えあうことでダイナミックに成り立っていくプロセスが坐禅なのですから、その意味合いにおいて、坐禅は南無であり、同時に阿弥陀仏でもある、すなわち南無阿弥陀仏そのものだと言えるでしょう。坐ることは、それだけでは単なる身体運動にすぎません。それが坐禅という宗教的な信仰に成るには、それが今述べたような南無阿弥陀仏、つまり念仏になっていなければならなかったのです。

坐禅がとりもなおさず念仏でもある、ということを描いた文章で述べてきました。坐禅も念仏も「生のいのち」からの深いよびかけ（本願回向）にもよ・お・さ・れ・て・任・運・に・無・作・に・それ・に・応・え・る・こ・と・で・あ・る・と・い・う・こ・と・に・つ・い・て・も・触・れ・た・い・と・思・い・ま・し・た・が・紙・数・が・尽・き・ま・し・た・の・で・、別・の・機・会・に・ゆ・ず・る・こ・と・に・し・ま・す・。

○プロフィール 1954年愛媛生まれ。灘高校卒、東京大学大学院教育心理学専攻博士課程を中途退学し曹洞宗僧侶となる。87年よりアメリカ・ヴァレー禅堂で禅の指導を行い、現在曹洞宗国際センター所長。著書『現代坐禅講義』、共著書『あたらしいわたし』（ともに佼成出版社）、『アップデートする仏教』（幻冬舎新書） 訳書ティク・ナット・ハン『禅への鍵』など多数。NHK「こころの時代」に出演、反響を呼ぶ。

連載

# 会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

能の番組を組むときに、「神男女狂鬼<sup>しんなんによきうき</sup>」という順に並べる、と聞いたことがあった。五番もお能を拝見していたら、みんなどうかしてしまう。

「それは江戸時代のことですね。朝もやの立ちこめる中でまず『翁』がスタートして、これは開演のお浄めの儀式です。千歳<sup>せんざい</sup>、三番叟もと出て、約九十分。それから神男女狂鬼と五番能が演じられて、その合間に狂言が四番。日が落ちて終るわけですが、観客は殿様と取巻きだけです。舞台をよく知ってますから、ときどき居なくなる（笑）。お茶をいただいたり、お香を聞いたり、食事をしたりして日本文化を全部楽しんで、観たいところだけ戻ってくる。笛がヒーツと鳴るのが合図で、あ、スタートしたとか、次にヒーツと鳴って、今、シテが出たなとか、中入りの間狂言<sup>あい</sup>が出て、またヒーツと鳴ると後シテが出たなとか。ブロックサインとしては笛の音が一番よく通るので、うまくできてます」

能の曲（演目）は二百九番あるというが、それぞれ五つの分野に分けられて、「神」は、神様が主人公の『高砂』『老松』『鶴亀』など。「男」は、源平を中心とする武将を扱った『安宅』『鉢木』『屋島』など、これは壮年の男が主人公なので面<sup>おもて</sup>をつけず、そのまま直面<sup>ひためん</sup>で演じる。

「女」は、この世の者ではない女性が主人公で、『野宮』『松風』『井筒』など。

「狂」は、文字通りの物狂いで、『隅田川』『三井寺』『桜川』など。

「鬼」は、後シテが鬼になる演目で『道成寺』『紅葉狩』『船弁慶』『大江山』『土蜘蛛』など。こうして見ると、歌舞伎には人形浄瑠璃から導入された「丸本物」のほか、ずいぶん「能取物」が多いことがわかる。

何年前か、貫太さんの『道成寺』を観て、歌舞伎舞踊の花やかさ、艶やかさとはまったく雰囲気異なり、優美、壮麗、凄艶……と、

2010年4月、中森貴太さん、三回目の「道成寺」。



襟を正したい気分を味わったものだった。

「私は二十九歳で、かなり早く披かせていただきました。この曲のときは足袋に皺が出た、滑つたりないように鹿皮の足袋を履くのですが、乱拍子のときに突っかかりそうになつて、かえってやりにくかった。

乱拍子は、本当は蘭拍子らんぱしのことで、物ごと

に<sup>た</sup>関ける、盛りに達する、つまり熟達のリズム、という意味なんです。歌舞伎でも最初にちよつと白拍子花子が爪先を上げて乱拍子めいたことをしますけれども、能では小鼓が一人で、物すごい気合いをこめて『ハーツ』と声を掛け、長い間合いがあつて『ボン』と打つと同時にシテが爪先をパツと上げる。また長い間があつて小鼓を打つと同時に爪先をパツと伏せる。この気合いを合わせる稽古に百日かかると言われています。こうやって舞台をひと巡りするのに何十分もかかるわけですから、演者も観客も大変です（笑）

乱拍子で眠くなつたころ、突然急の舞になつて、最大の見せ場「鐘入り」となる。

歌舞伎では鐘の裏側の切り込みの扉が開き、花子は幕に隠されて上手へ引っこみ、何人もの後見が総がかりで着換えさせる。

しかし幕のない、いわば裸舞台の能では、シテは薄暗い鐘の中でただ一人、黙々と後シテに変らなければならない。

「その前に、難関の鐘入りが無事にできたかが問題です。鐘は竹でできて紫の布を貼ってありますが、下に砂袋などで重みをつけて、七キ口がありますからね、それが轟然と落ちてくるときに、シテは鐘の中の両脇に手をかけてピョンと飛び上がります。うまくタイミングが合えば、前シテが鐘の中に吸いこまれたように見えるわけです。」

ところがここでよく事故が起るんです。跳ね飛ばされて引っくり返った足の上に鐘が落ちて骨折したり、もろに頭に当って気絶したりとか、ひどいところ続いたことがあります。

私の師匠家では、鐘が落ちた直後に後見が鐘の後ろでトントンと床を叩くんです。中からトントン無事ですすよ、という合図がなければ鐘は上げずに、後見が紋つき袴姿で後シテを舞って、それが終わるまで中で死んでなさい、となるわけです（笑）。きちんと稽古を受けないと事故が起きるので、必ず稽古は受けますし、事故は師匠の責任になります」

幸い、中森家では誰もそうした事故には遭っていない。

「で、無事ならば暗い中で孤独の装束付けが始まります。『茶の湯の点前のつもり』という口伝くでんの通り、手順を徹底的に頭に入れて、使ったものは必ず元へ戻して、床へは何一つ置かないようにします。鐘の中にはあちこち仕掛けのポケットがあつて、必ず自分でそこに後シテの装束や般若の面や鍔や針の道具類を入れておきます。鐘が落ちたらまず面をはずして、所定の場所にしまつて、タオルで汗を拭いて、水筒の水を飲んでひと落着きしてから、唐織りをぬいで、そこへしまつて……というふうな。薄暗い中で鏡もぼんやりとは見えますが、ガラスのだと割れるといけなないので銅の鏡ですから、余計ぼんやりとしか見えませんしね」

『道成寺』には、いろいろと大変な決めごとがある。

「前シテの装束をつけるにも、どういつつけ

方をしているか工夫があるので、前に演じた人しか見てはいけないことになっています。また、出の前に幕の中で特別な足使いがあるので、『道成寺』だけは経験者しか幕上げもできないことになっています。きちんと稽古をつけてもらって口伝を教わったというデモンストレーションであり、だからこそ経験していない人には見せられないわけです」

昭和六十一年、貫太さんは二十五歳。こんなややこしい世界とはまったく無縁のモダンなお嬢さんと結婚する。大学では西洋史が専攻で、それまでに一度もお能など観たことがなかった女性で、だからこそ飛びこめたのかもしれない。

「友人のお母さんの紹介で見合いをしたんですが、私の母親が占いの先生に『あ、この方ですね』と言われたらしくて、両親がついてきてすぐに決まりました。披露宴はホテル・ニューオータニで、主賓は当時若手議員、だっ

た小泉純一郎元首相です。鎌倉が選挙区でしたからね。やはりさすがにスピーチはお上手でした。

めでたい祝言小謡として私のほうの出席者全員が『高砂』の一節を謡ってください、  
「四海波静かにて 国も治まる時つ風枝を鳴らさぬ 御代なれや あひに相生の松こそ めでたかりけれ げにや仰ぎても事も疎かや かかる代に 住める民とて豊かなる 君の恵みぞ ありがたき 君の恵みぞ ありがたき  
と、これを全員プロの能楽師が切れのいいアップテンポで大合唱するのはすごい迫力で、感激しました」

三佳<sup>み</sup>夫人との間に二人の男児を授り、長男の健之介さんは慶応大学卒業と同時に中森家の師匠筋に当る観世喜之家に内弟子として入って修行中だ。

「能の世界は、宗家、分家、職分家までが弟子を育てることができて、中森家は準職分家

ですからそれができません。私は父の判断で住み込まないで通いの弟子でしたから、別の勉強もできたんですが、正統なルートを踏んでない、外様のイメージが強いんです。それが今回、長男を五年間喜之家にお預けすることで、中森家もこれではつきり九皋会の一員になれたね、ということですかね」

父晶三師は七十歳でシテを引いた。舞台でスツと立ち上がるときに、多少でも前傾姿勢になるようだったら引退する、と前から決めていたことだった。

「引退は健之介が『烏帽子折』をやるときでした。この曲は、舞台上で牛若が元服して烏帽子をつけるのと、能楽師の家の子が子方を卒業して一人前のシテ方になる第一歩を踏み出すのが重ね合わさっているんです。ですからこのときのシテもその子の烏帽子親にふさわしい人物がつとめるので、健之介のときは将来の師匠である観世喜之師がシテの熊坂長範をお願いしました。これは鞍馬山を逃げ

出した牛若丸が、金売吉次の財宝を狙った熊坂長範を天狗に習った兵法で退治するという曲です。

その二年後、今度は『土蜘蛛』で、私がシテ（土蜘蛛）、父が源頼光、長男が胡蝶、次男の慈元がトモの独武者をつとめて中森家三代が揃いましたが、父はこれで装束を着るのを最後にしました。その後も地謡などには出ておりましたけれども」

父晶三師は七十九歳を一期として没した。鎌倉以外の各地にも薪能を企画、定着させ、能を広く普及した功績を高く評価され、文部省地域文化功労者、神奈川文化賞など数々の表彰を受けて、満ち足りた生涯だった。

「舞台に立つ者は親の死に目に遭えない、と言いますが私もそうで、父より一年半早く亡くなった母のときも、父のときも間に合いませんでした。二人は晩年まで本当に仲がよくて、よく連れ立っては近くのレストランに出かけたりしていましたから、母も幸せだった

と思います」

能の世界を探索し始めると面白い話が多く、江戸庶民の生活にも深く関わっていたことがわかってとても興味深い。

『正尊』を観たときは、歌舞伎のようなトンボや仏倒れといった派手な立廻りがあるのにもびつくりさせられた。

「立廻りみたいというのは、『喚き叫んで戦うたり』のとき、頼朝の腹心の家来、土佐坊正尊側と、義経側とが切り合いになるところがあります。ここに若手の腕ききが揃うと、トンボや仏倒れのような趣向をこらしてお観せするわけです。

この曲は、正尊の上洛を知って疑いを抱いた義経が、館に呼び寄せて詰問すると、自分は決して刺客として来たのではない、と言って起請文きしょうもんを書いて空読みするんです。それで急場は逃れますけれども、義経側がなおも油断なく備えていると、果して正尊は堀河御所

へ夜討をかけてくる。しかし弁慶たちの奮戦で、寄せ手は全滅、正尊は捕えられる、という筋なんです」

これで面白いのが起請文の話。歌舞伎でも『心中天網島』の恋人同士、小春治兵衛が取り交して大事に持っているのが起請文だ。

正式には熊野権現の護符に誓詞を書き、これを焼いてその灰を飲むと、もし誓いを破ったときには血を吐いて死に、やがて地獄に堕ちると言われるほどの厳正な誓いの立て方。

「正尊はそれを承知で『討手にまかり上ることなし』と書いてそれを読み上げるんですから、内心では恐れおののきながらも真実味をこめなくてはなりません。弁慶の勧進帳読み上げに比べてずっと地味で、それだけにまた難しいものなんです」

それでおかしいのは、上方の大売出しを「誓文せいもん払い」と言い、これは神に誓って掛値はしてませんという意味だが、その神というのは、なんと商家が信心する「正尊様」なの

だそうだ。

ところで、能には武蔵坊弁慶の登場する曲が五番ある。弁慶をこんなに有名にしたのは、『義経記』と、能のおかげらしい。

「まあ、公式文書たる『東鑑』には弁慶は二か所しか出てきません。それも屋島の合戦と、四国落ち（『船弁慶』）で、さしたる派手な働きもしておりません。しかし能では、弁慶が若い順に『橋弁慶』（五条の橋での牛若との出遭い）、『正尊』、『船弁慶』（義経の愛妾静を都に帰し、船出すると平知盛の怨霊に悩まされる）、『安宅』（『勧進帳』）、『摂待』（奥州へ落ちた一行が佐藤兄弟の館に泊り、老母に継信討死にの様子を物語る）の五番です。このうち弁慶がシテなのは『橋弁慶』と『安宅』で、あとはワキ方の役ですが、どれもシテに劣らぬ大役です。最初に挙げた二番は荒武者としての面、次の二番は知勇兼ねそなえた大人物、『摂待』ではさらに人情家の一面も加わって描かれています」

しかし何と言つても一番いい役の弁慶は『安宅』だろう。貫太さんが『安宅』を披いたのは三十二歳のときだった。

「父の代役で、厚木の薪能のときでした。周囲からはまだ早いと言われましたが、代役ということで父が押し切りました。弁慶は最初から最後まで出ていて、せりふも多いので、思つていたより何十倍も大変でした。力んじやいけないと言われていましたが、緊張のし通しで、勧進帳を読み上げるころになつたら声がボロボロになつてました。能には山伏問答がありませんからまだ助かるんですが。もつとも金剛流には『問答』という小書があつて、歌舞伎を逆輸入しますけれども。」

それと、能の『安宅』では、富樫は太刀持一人を従えているだけなのに對して、義経側は弁慶と九人のツレ（家来）、それから間狂言の強力、全部で十二人というのが見た目にちよつとアンバランスかもしれません。

とにかくお披露のときはボロボロの声のま

定期開催している能知会で、能面の解説をする中森さん。



最後まで通しましたが、二度目以降はそんなこともなくなつて、今では何度でもつとめなくなる大好きな曲になっています」

中森家では父晶三師の代から能楽普及のため、毎年秋に文化庁の依頼を受けて小・中十六校を廻っている。ほかにいろいろなところから要請があつて、貫太さんは子供たちと能を結びつけることで裾野を広げようと懸命の努力をしている。

ちなみに、私が小・中学生のころ、文楽や、前進座の『アラビアン・ナイト』や、コンサート形式のオペラ『カルメン』などの学校公演があり、鮮烈な印象が残っているが、ついにお能の訪れはなかった。

小学生はお行儀よくお能拝見ができるのだろうか。

「最初によく説明しますから小学一年生でも四十五分、集中して観てくれます。文化庁関係の学校公演では『安達原』あたがはらを舞うことにし

ています。これは諸国行脚の山伏が奥州安達原に行き暮れて、一夜の宿を乞うと、老女が親切にもてなしてくれて、聞を見るなど言い置いて薪を採りに山へ行く。あまり念を押されるので中をのぞくと人の死骸の山。一行が逃げると鬼は本性を現して追ってきますが、山伏の祈りに敗れて消滅する、というものです。この曲に限って後シテは黒般若の面をつけてるんですが、小学生にはそれが面白いらしくて、『般若がんばれえ』なんて奇声が飛ぶことがあります（笑）。寝てられるよりはよっぽどいいですね。かえって中学生くらいになると、最初からわかんないと決めてかかっているのが、興味を持たせるのが大変です」

では、能を興深く鑑賞するためには、昔のお殿様のように自身で舞えるようになるのが一番、ということだろうか。

「そうですね。今お稽古人口は、男性が二割、女性が八割、以前はもつと男性が多かったですが、そんなところです。仕舞二年、謡十年

と言われている、仕舞は動きの基本を徹底的に教えこめばそんなに難しくありません。とにかく殿様がおぼえやすいように、シンプルにできていますから（笑）、形よく舞うには二年もあれば大丈夫です。しかし稽古はまず謡から始まります。謡えない人には舞えませんからね。どうか耳障りでなくなつて、さらに、うまいね、と言われるようになるには、十年はかかりますけど、教え方次第でしょうね」

謡曲のお稽古は上品で高尚で、日本古典文学の素養も身につけて奥が深い。健康法にもなる。

理論派で情熱的で心優しい貫太先生は、いつでも能楽普及のために、あらゆる努力を惜しまない。

（この項おわり）

人、世間愛欲の中に在って、

独り生じ独り死し、

独り去り独り来る。

（『仏説無量寿經』卷下）

人というものは俗世の営みの中で欲望の赴くままに生きていくが、結局は独りで生まれ、独りで死に、独りでこの世から去り、独りでこの世にやってくる。

「孤」を生きる

（浄土宗総合研究所編『現代語訳 浄土三部經』）

「孤独」という文字がメディアを賑わせるようになったのはいつ頃だろう。二年前、札幌の四十代姉妹が誰にも知られることなく亡くなり、死後だいたい経ってから発見されたとの報道は、記憶に新しい。わたしたちの国の「今の、現実のひとつ」をあらためて露にした出来事だった。

こうしたいましい事件は、実はすでに七〇年代から報告されている。各地で都市化が進み、集団よりも個を重んじる傾向の強まりと相俟って、隣人同士のコミュニケーションが稀薄化、はなやかさや賑やかさ、自由を享受し得たその陰で、望んでいたはずの「個」は、いつの間にか「孤」に姿を変えていたということなのだろうか。今や都市部に限らない。地方でも、とくに過疎の進む地域に懸念は広まる。

札幌の出来事の後、なんらかのかたちで「孤」に関わる事件の報道は数を増しているように思う。しかし取り上げられているのはほんの一部だろうから、実際はどれほどになるのかと考えてしまう。先輩や友人の住職らとの間にも、最近そうした亡くなり方をする檀信徒が増えてきたとの話が出る。ドキュメンタリー番組でも取り上げられ、官民の取り組みなども紹介されているが状況は厳しそうだ。

先日観たテレビ番組には、複雑な思いで釘付けにさせられた。レンタルフレンドなる「サービスマン」が活況を呈しているらしい。家事や介助ではなく、「フレンド」の名のとおり、話し相手、お茶飲み相手から、散歩や旅行のパートナーにいたるまで、ニーズは多岐にわたるという。取材に応じていた、奥さんを亡くしたという初老の男性は鎌倉への日帰り小旅行を楽しんでいた。二十代後半の男性は、やわらかな春の陽ざしの下、公園で一時間のキャッチボールに汗を流した。相手は前者が三十代、後者が二十代と思しき、いずれも女性。キャッチボールの相手女性は受け方も投げるフォームもかなりサマになっていたことに妙に感心した。「多様なご要望に応えられるように」(経営者)との企業努力なのだろうか。「業」であるから対価が発生する。たしか一時間一万円ほどだったろうか。男性はいずれもその場で支払いを済ませ、女性と笑顔で別れた。経営者サイドに対しては、アイデアに長けていると讃ずることも出来ようが、そうした要望が今の社会には広く、多く存在していることの証左であることも間違いない。人は「孤」や「独」に悩んでいる。老若は関係ない。

孤独が何より辛い——。番組に登場していた人は、そう漏らす。

このまま年老いたら、いずれ自分も——。そんな危惧が<sup>にじ</sup>滲み出ている。

妻子とともにあり、親戚や友人とのつながりの中に暮らす筆者などが安易にコメントするのを、払いのけるかのような切迫感がそこにはある。故郷に独居する老母と重なる。第三者的に観られる番組ではなかった。

よしんば今はそうでなくとも、いつ、どんなきっかけで孤が訪れるかもしれない。これは誰にとつても同じだ。筆者も。

経典に尋ねてみると実に直截的表現が目に飛び込んでくる。

そもそも人とは、独りなのだ。

今まさに、その苦しみを嘗めて<sup>な</sup>いる方には、傷口を塩でもまれるかの如くに感じられるかもしれない。しかしこれは、実際にそばに<sup>な</sup>りながらいる人がいない、という物理的なことを意味するのではない。人間存在における根源的なこととして、娑婆では誰もが「独り・同土」と教えている。「悪趣なる娑婆の真の相に早く気づき、善なる道を歩むことが肝要」と、経典は続ける。「仏の名をとえ、祈り、毎日をあなたなりに大切に送りなさい。やがて安樂の、先立つた方々と再会かなう浄土に赴くことを期して」。そう置き換えることができる。祈ろう。孤に悩む人も、まだ、そうでない人も。

今夜はもう遅い。あす朝、母に電話しよう。

(小村 正孝)

小説 快僧渡辺海旭

# 壺中に月を求めて

前田和男

第五十二回

第二部

ライン  
来江の古城遥かなり

盟友・荻原雲来 その2



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は、小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。才気煥発ゆえ将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校、同本校へ進学を許され、さらに明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として、廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の輿望を担って、当時印度学の拠点であったドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍ら、キリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。留学四年目、スイスはバーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表、そこで仏教に造詣が深いオーストリアⅡハンガリー帝国元駐日代理公使ハインリッヒ・クーデンホーフ・カレルギー伯爵と出会い大いに刺激を受ける。ストラスブルクに戻った海旭は、「半年先輩」で同じ宗門海外留学生の荻原雲来から、ヨーロッパ初の比丘であるニカーナティ口カルの存在を知らされ強い興味を覚える。一方で、学究面で雲来にますます引き離されているとのあせりがあった。当初宗門から言い渡されていた留学期限の四年が迫っており、ロイマン教授の口添えで延長は叶ったものの、海旭も雲来もそろそろ成果が求められていた。

## 学究一途の

### 盟友に励まされ

渡辺海旭は回想から覚めると、坊主頭に無地の衣姿の盟友を見つめた。目の前の茶が半分ほどになっていた。どれぐらい回想の中にいたのだろうかと思った。片やわが身は長髪をリーゼントに撫でつけ洋装に身をかため、傍らには飲みさしのまま泡が消えたビールのグラスがあった。なんとも対照的な二人だったが、その間には、しばし言葉を交わさなくとも理解しあえる暖かい空気がたゆたっていた。海旭はおもむろに口を開いた。「ど、独有。お、おぬしのおかげだ。れ、礼をいう」荻原雲来はすぐには何のことやらわからず首をかしげた。

海旭は慌てて補足した。「あ、あちこちフラフラして腰が定まらぬ僕が、な、なんとか学問に踏みとどまれているのは、おぬしのおかげだ」

雲来は手を振ると言った。「いやいや、君に感謝されるようなことは何もしておらないよ。君と机を並べてひたすら学究に励んでいるだけだ」

海旭も手を振り返した。「い、いや。そ、そのおぬしのひたむきさが私には大いなる励みになっているのだ」

雲来は真顔になった。「感謝すべきは私のほうかもしれんな。君が『浄土教報』で私のことをさんざん持ち上げるものだから、ますます励もうという気になる。午前中は大学図書館、午後からは下宿の部屋で机を並べながら寝食を忘れて数日も利かないほど原典研究に打ち込んでいる、そう書かれたら怠けるわけにはいくまい」

「こ、これか」と言つて、海旭は文机の引き出しをあけると、故国から三四カ月遅れて届く『浄土教報』を一束に綴じた中からめくって示した。そこには、海旭が留学先のドイツから寄せた次の記事が掲載されていた。

「午前は多く図書館にあり。華嚴の梵文を読む。大乘の妙理は、壮麗にして幽遠の趣に富む。梵語の間に躍然として、身は毘盧遮那海蔵にあるの感あり。独有は机を隔てて般若を研む。大品の深趣、精研力学、彼が如きを以てす。その造詣や知るべからず。同寓共に食し同室に寝ぬ。而も往々にして相話せざること数日にわたるあり」

さらに雲来は言い添えた。「今や当地の学者からも高く評価されるサンスクリット学者で、帰国したら日本一の東洋学者になれるというのも、ほめすぎだろう」

「こ、これか」と海旭は寄稿した『浄土教報』の次の記事を示した。

「されど其深き仏教文学の知識と博覧大蔵經を自由に考証するの技量は他の到底及ぶべからざる長技にて、此点に於ては此地の学者等

も荻原が我国従来の梵学者に比して遠く数頭地を超出するものたるを認め来しかの如く、衷心より嬉しく喜ばしく候。希くは荻原の此方面に於て着々研究を重ねて我国に於ける東洋学者として一流に立たんとは切望の事に候」

雲来は記事に目を走らせると言った。「そう、この記事だ。君の名調子にかかると、經典と睨めつこの駆け出し学僧も、斯界の碩学せきになつてしまひ、有難い反面、恐ろしくもある。これが宗門の要路に読まれていると思うと、私もうかうかしておれぬ」雲来は戸惑気味の海旭に気づいて一息入れた。「いや、迷惑と言っているのではない。ここまで学究をきわめられたのは、貴兄の筆のおかげだと言っているのだ。こつちこそ貴兄に感謝せんと。君が私に感謝するのは逆だ」

「な、何ということだ。おぬしを褒めることで、巡り巡つて、ほ、僕は僕自身をばげまし

ているということか。僕は僕に感謝せよと。な、情けは人のためならずか」と海旭は言つてビールのグラスをぐびりと啜ると、苦笑した。

雲来もつられて微苦笑を浮かべると、「それにしても、君は私のことを褒めすぎだぞ」「い、いやいや、おぬしの学究一途に感嘆してのことだ」これは海旭の偽らざる気持ちだった。

「こ、ここを見てみる、ときには友人として辛口の批評も加えてある」と言つて海旭は先程の『浄土教報』の記事の導入箇所を指さした。そこには海旭の雲来評がこう記されてあった。

「次第に實際問題に遠かり哲学上の思弁や社会観などに毫も頓着せず、余りに仏教文献学者（ブッディステイシエ・フィロロゲ）たるに傾かんとするは弟には余り面白からず」

雲来は記事に目を走らせると再び苦笑を浮かべた。「これがどうかしたか。君の見立てのとおりで、よくぞ言ってくれたと思ひこそすれ、私には痛くも痒くもないぞ」

「そ、そうか。『現実にくとく学者然としていて面白くも何ともない』はおぬしには褒め言葉か。こ、こいつは参った、参った」と海旭はリーゼントで固めた頭を叩いた。

雲来は苦笑を消して衣をただした。「私としては、そいつを裏返して君に返したい。すなわち、実際問題に関心があり、哲学やら社会に頓着しすぎなのは、仏教語学者から遠ざかるばかりで、いかがなものかと」

「こ、こいつは参った。僕にもっとまじめに勉強しろと。これはとんだ藪をつついた」と言う和海旭は腹を抱えて笑い、つられて雲来も笑い声をあげた。

## 「ドクトル」を とって帰国せよ!?

「まじめに勉強しなければならないのは、君だけでなく私もだ」と雲来は再び真顔になった。「そろそろ、当地での学究に区切りをつけないと……」

「そ、そのとおり。せっかくロイマン先生の口添えで留学を延長してもらったのだから」と海旭は話題を切り換えた。「お、おぬしには早くドクトル（博士号）をとって帰国してもらい、私の分まで宗門の期待に添えてくれ」「何をいうか」と雲来は言い返した。「君こそ、ついこの間、スイスはバーゼルの万国宗教歴史学会で堂々たる研究発表をしたではないか。それをもとにドクトルをとったらどうだ」

「ほ、僕にはまだむりだ。ご案内のとおり、あちこちフラフラして腰が定まらぬ。で、でも、おぬしなら朝飯前とはいわぬが、それほ

どむずかしくはなからう。あれほど学究一途に腰をすえているおぬしがなぜとれぬ。ほ、僕には不思議でならぬが」海旭は雲来の顔を覗き込んだが、目を逸らさられた。「こ、この間、ロイマン先生に会ったら、いたく心配されて、あの男なら勉強ぶりからいつてとくにとれていて当然なのに、肩書きはいらんの一点ばりで困ったものだと思痴をこぼされた」

「そうか：ロイマン先生には誠に申し訳ないと思っている：」と雲来は口ごもった。

海旭はビールをもう一本あけるとグラスについだ。たしなめるような目つきでそれを見る雲来にはかまわず続けた。「お、おぬしの代りに、ロイマン先生にこう答えた。『そ、そもそも、荻原のような真正の学者にはドクトルなんぞの看板は要らんです。ドイツやフランスにドクトルはいるけれど、そんな連中よりも力をはるかに上であることは先生もよくご存知のはずです』と。あ、有難迷惑だ

ったかな」

「いやそんなことはない」と雲来は頭を振った。「で、先生はどういわれた」

「『獅子賢の小品般若釈論の研究は、大蔵の知識がなければ、到底なしえぬものだ。わが荻原なくしてヨーロッパの仏教学者では一ペーじたりとも読み進むことはできない』と」。海旭はグラスの麦色の液体を喉に流し込むと続けた。「そしてこうも言われた。『ロンドン大学のベンドール博士やライデン大学のスバイヤー博士から、君のところには凄い弟子がいてうらやましいと誉められて、私も鼻高々だったよ』と」

「そうか、そうか」雲来はいかにも嬉しげに坊主頭を衣の袖で撫でると、何度も頷いた。

海旭は内心で嫉妬に近いものが沸いてくるのを、あわてて抑えこんだ。

ベンドール、スバイヤー両博士はいわば仏教梵語学の大関か横綱というべき存在だったが、以来、雲来には二人から著書が贈られた

り、質問がくるようになった。荻原は無冠・無位ではあるが、留学数年にして、斯界ではすでに一級の学者であり、したがって、博士号ドクトラントなど望めば即座に授与されても何の不思議もなかった。それにしても、なぜ雲来はドクトルをとろうとしないのか。海旭は胸裏に蟠ったままの疑問を解くために、攻め口を変え、ことにした。

## 雲来の快拳！

### 最古の聖典原文を発見す

「と、ところで、この春までおぬしがケンブリッジに行ってやり遂げたこと、あれは快拳という他ない」と海旭は言った。「ドクトルの三人分の値打ちはあると思うのだが……」

と、それまでドクトル話に言葉を濁していた雲来は、やおら顔を輝やかせると、よくぞ聞いてくれたといわんばかりに身を乗りだした。「まさかあんなすばらしいものが見つかるとは思わなんだ。わが人生最大の僥倖だ。

ほんに生きていたよかった」冷静沈着な男はいつになく昂奮気味に話しはじめた。

雲来が一気に語ったのはこんな概要だった。

ちょうど一年ほど前の秋のことだ。雲来はドイツのストラスブルク大学にあつて、イギリスはケンブリッジ大学から取り寄せた膨大な書庫目録を渉猟していた。同大学の蔵書は五十万巻。雲来ら仏教学徒にとつて垂涎の的というべき古代珍奇の仏教写本を蔵すること欧州第一といわれていた。その多くは七つの海を支配する大英帝国の探検隊が古代仏教が伝播したアジア各地から「文化戦利品」として持ち帰ったものであった。もとより門外漢の探検家たちにはそれを精査分類する能力があるはずもなく、とにかく古そうなものなら何でも収集してあるため、まさに玉石混淆状態だった。

そんな膨大な石の山の中に玉を訪ね求めて、雲来は来る日も来る日も気が遠くなるような

地道な作業を繰り返しているうちに、仏教の発祥を知る上で貴重な仏教聖典『瑜伽論』『菩薩地』を発見したのである。それは、瑜伽論のサンスクリット原本としてはおそらく最古とされる大発見であった。雲来はその僥倖に欣喜雀躍した。なんとしても現物をこの目で確かめて、じっくりと研究したいと願った。しかし、目録は取り寄せられても現物は館外不出なので彼の地の大学まで赴くほかない。そこで、ロイマン先生に相談すると、快く梵字学の泰斗ベンドールに紹介の労をとってくれ、同大学図書館を利用する許可を得ることができた。さっそくドーバー海峡を越えて現物を確かめてみると、やはり本物だった。しかし今と違って複写をしたり写真にとることは叶わない。雲来は一字一句を写しとるようになった。毎日、図書館が開く午前九時から閉館する午後五時まで通いづめ、昼食時二十分を除いて、ひたすら写本を続けた。日本とは違って大晦日も元日も閉館しているの

で、年末年始もなかった。おかげで世界の中心地の有様を報告できないことを故国の家族・知人にこう詫びるはめになった。

「渡英以来已に一閏月、未だ郊外のみならず市内の見物さへ怠り居る位にて、前條の事業に忙はしく委悉報道するに<sup>いまま</sup>遑あらず。各位乞ふ之を<sup>ゆる</sup>恕せ」

また新年の挨拶賀状を英国から送り、故国の家族・知人を驚かすことになった。

「一九〇三年十二月 小生二十八日当地劍橋（ケンブリッジ）にて越年、其際該地の絵端書を以て新年の御祝賀可申上候」

（この項続く）

御宿とメキシコを結びつけたもの

# 友好の絆

第三回

森清鑑

## 大多喜城と本多忠勝、忠朝親子

大多喜城は、御宿から約八里の山城である。

今の地勢で云えば、御宿を出て、西方向に転じ、千葉を横断する大多喜街道（勝浦から東京湾市原）に出る。これを北上し、夷隅川いすみの所で（船子交差点）左折、西に転じる。町全体が蛇行する夷隅川に包まれており、その内側には南北に城下町通りが突っ切り、ここを底辺として西へ迫り上がる山に築かれた城郭都市。城下町通り沿いには、江戸時代の古民家、宿、蔵屋などが建ち並び、今なお歴史の風情を感じさせる。夷隅鉄道（外房大原から来る）大多喜駅近辺に來れば、前方、遠くに現代の城が聳え、駅の左に大きな大手門（歡迎門）が道を跨いで立っている。

## 本多忠勝

一五九〇年、家康江戸入府とともに、上総の地は家康のものとなり、十万石の大多喜藩

が成立。家康は腹心の部下、本多忠勝を領主に派遣する。この地が江戸を守る重要拠点と見なしたからに他ならない。

忠勝は、周囲を夷隅川に囲まれた天然要衝の山頂に城を築く。ここはそれ以前から山城としての地形を備え、里見氏などの重要拠点であった。忠勝は、これを利用し、本丸、二の丸、三の丸を設け、ふもとに城下町を整備。本格的な近世城郭を造る。

本多忠勝は、徳川四天王、徳川十六神将、徳川三傑の一人。敵軍の武田をして「家康に過ぎたるものは二つあり。唐のかしらに本多平八」（忠勝の別名、平八郎。唐のかしらとは、家康のヤクの尾毛飾り兜）と言わしめた。本多氏は三河徳川本家の譜代。忠勝は、桶狭間の前哨戦で初陣、敵の首を挙げる。姉川の戦いでは朝倉軍一万に単騎駆けを敢行。二俣城の戦いでは最も危険な殿をつとめ、家康の撤退に成功、三方ヶ原、長篠の一番では、その戦いぶりに敵味方を問わずに賞賛され、



本能寺の変では取り乱した家康を諫め、有名な伊賀越えを行わせる。小牧・長久手の戦いでは、豊臣十六万の前に家康は苦戦に陥ったが、五百名の兵を率いて駆けつけ、大軍の前に立ちはだかり、秀吉からも東国一の勇士と賞賛される。この時、秀吉は「あ奴だけは殺してはならぬ、将来、家来にしたいから」と語ったという。関ヶ原では、諸大名に書状を送って東軍方につける工作に活躍。戦場では、常に家康の矢面に立ち、生涯における合戦五十七回でかすり傷一つ追わなかったという。また、武勇の人でありながら、大阪の役後、家康が散々に煮え湯を吞まされた真田家の存続を嘆願し、結果として、真田家は、信濃上田領を江戸末期まで存続。徳川家に忠誠を尽くすことになる。こうした断トツの功績から家康の忠勝への信頼は、「極まれり」ということになる。忠勝辞世の句に「手柄を立てなくとも、事の難に挑みて退かず、主君と討ち死にしても忠節を守る。これぞ侍」という一

節があり、彼の信条を良く映し出している。世の中が安定し、同じ本多一族の本多正信がいれば権謀術数をもって、幕府を牛耳ることになり、晩年不遇とされているが、忠勝は正信を嫌い、「あやつとの血筋は全く無関係」とまで言い捨てている。そこには敵軍からも賞賛された、清廉潔白な武士の姿が垣間見える。こういう人が大多喜城を築いたのである。難攻不落。城下町も栄えた。かくて、大多喜は、一万二千の人口と上総中枢の重要拠点となったのである。大多喜藩初代十年、事が成ると、忠勝は桑名十萬石の領主となる。従って忠勝の墓所は、桑名浄土寺と大多喜の、彼が開基した良玄寺にある。そして夷隅郡大多喜は、忠勝の次男、忠朝に引き継がれる。この人がまた父親の清廉潔白な武人の血筋を受け継ぎ、一六〇一年、若いながら家康の愛することこの上もない大多喜の二代目当主となる。こうしたおり、一六〇九年、ロドリゴは御宿岩和田に遭難漂着したわけである。ロド

リゴの幸運とはまさにこのことにあった。

## 本多忠朝

忠勝には、長男忠政と次男忠朝がいた。忠政はどちらかというと政治家タイプ。忠勝の気性を継いだのが忠朝である。であるから、忠勝はかわいくてしょうがない。しかし、死するに及んで、家督は無論、資産も全て長男の忠政に譲る。忠政は桑名領主二代目となり、忠朝を大多喜城二代目に指名した。この時、忠勝は、蓄えの金一万五千両だけは、忠朝にと遺言した。しかし、忠政はこれも自分のものとして蔵にしまった。周囲は騒ぐ。だが、忠朝は「兄は多くの将兵を抱え、なにかと物入りがかかる」とあっさりこれを拒否。この弟の態度に、忠政は恥て、この金を半分にし、忠朝に分け与えんとする。すると忠朝はこれをも固辞して受け取らない。忠政はそれでは俺の気持ちが悪く承知しないという。しかたなく、忠朝は「それなれば、その金を縛って兄の蔵

にそのまま保管しておいて下さい。余程のことがあったときのみ使わせて頂きます」と話をまとめた。無論、忠朝はその金を生涯使うことはなかった。こういう高い品格の持ち主だから、御宿での異国人の遭難に、家来の反対を押し切って、助けるどころかその先の友好に繋げたのである。

忠朝は、家康の小姓として育った。だから、家康が可愛くないはずがない。初陣は関ヶ原。父親に引けを取らぬ武将になった。ロドリゴ一行を助け、スペインのヌエバ・イスパニア、首都メキシコとの友好の絆を築くことになった。一六〇九年から六年後の一六一五年、家康最後の戦いとなった大阪夏の陣。淀君、秀頼は、腹を切り、大阪城は炎上。以後、大きな戦は明治維新までなかった。敵将、真田幸村の活躍もあり、家康の心胆を寒からしめた、この戦で、忠朝は獅子奮迅の活躍をし、三十三歳の命を終えることになる。黒田官兵衛の子、長政が大阪の役の戦勝記念として描かせ

た、有名な「大阪夏の陣図屏風」がある。戦場で入り乱れて戦う夥しい将兵が描かれているが、この絵の主人公は、家康でもなければ、悲劇の英雄真田幸村でもない。屏風絵を描かせた黒田長政でもない。屏風絵を眺め回すと、中央に複数の敵を相手に奮戦する騎馬武者に目が行く。そうそれが忠朝なのである。この有名な屏風絵の主人公は、忠朝である。戦い終わって、数人の家来が彼の遺体を台車に乗せて家康の前を通りかかる。家康は家来を止め、しげしげと忠朝を見、頬に手を触れると号泣したという。そしてその場で、その家来達に褒美をとらせ、忠朝の家来で生き残った者があれば、一人残らず感状を与えるように命じた。そういう親子が築いた大多喜城であるから、堅固なことは、この上もない。多くの民衆がこの地に集まり、城下町は繁栄し、あたかも房総の中心地のごとき活況を呈するに至る。大多喜の殿、本多忠朝は、民衆の崇拜を受け、忠朝も領民の幸せに応える。しか

も、江戸城にいる二代將軍秀忠、駿府の大御所、家康と密接な連絡を常に取り合っており、その信認も厚い。領下の御宿に遭難したスペイン人の報に接したとき、家来の反対を押し切ってまで、救助した御宿の民衆に謝意を呈すると共に、支援に踏み切った。まずは、彼の人道的な信念から。それに家康がスペインとの交易を望んでいたということを知っていたことであろう。ロドリゴのことも逐一、秀忠、家康に知らせ指示を得ている。大多喜の殿は、御宿でロドリゴ一行と初めて会見した時に約束した、遭難者三百十七名の食料を初めとする、生活物資支援を始める。御宿村民の各家で手厚い介護を得、人々は元氣を取り戻し、村民との交流・密着度もますます高まっている。こうして三十七日間の御宿での生活を終え、全員大多喜城下へと引き取られることになる。ロドリゴを初めとする彼等の不安は払拭され、日本の民衆と、神の加護に感謝した。

(つづく)

# 暑中お見舞申し上げます

平成二十六年

浄土門主  
総本山 知恩院 門跡第八十八世

伊藤唯眞

大本山 増上寺  
法主

八木季生

大本山くろ谷金戒光明寺  
法主

高橋弘次

大本山 百萬遍知恩寺  
法主

服部法丸

〒606・825  
京都市左京区田中門前町一〇三

大本山清浄華院  
法主

真野龍海

大本山善導寺  
法主

阿川文正

大本山光明寺  
法主

宮林昭彦

鎌倉市材木座六・十七・十九  
TEL 〇四六七 (111) 〇六〇三

浄土宗務総長

豊岡鏖尔

法然上人御誕生地  
浄土宗特別寺院

美作 誕生寺

〒709・362 岡山県久米郡久米南町里方八〇八  
TEL 〇八六七 (二八) 二一〇二  
FAX 〇八六七 (二八) 二一六二

(学)大乗淑徳学園・淑徳大学  
理事長

長谷川匡俊

〒174・8645 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園  
淑徳S.C中等部高等部

理事長  
校長 麻生諦善

# 暑中お見舞申し上げます

平成二十六年

養蓮寺

田中光成

〒194 0032 町田市本町田三六五四

大鹿山弘経寺前住職

金田進徳

〒302 0023 茨城県取手市白山二、九、二八

浄土宗檀林  
吞龍上人祈願所

蓮馨寺

住職・浄土宗議會議員 糸原恒久

〒350 0066 川越市連雀町七、一  
電話 ○四九 (一一二) ○〇四三  
FAX ○四九 (一一六) ○六七六

白本尊阿弥陀如来

静岡 宝台院

住職 野上智徳

赤坂六地藏尊

浄土寺

住職 阿川正貫

〒107 0052 東京都港区赤坂四、三、五

鶏頭山安楽寺

飯田實雄

〒399 4115 駒ヶ根市上穂栄町九、五  
電話 ○二六五 (八三) 一三三六〇

清水湊

忠高山 實相寺

〒112 0002 東京都文京区  
小石川三丁目十四番六号

無量山 傳通院

電話 ○三 (三八一四) 三七〇一 (代表)

家康公祖母の旧地

玉桂山 華陽院

住職 堀田卓文

勝願寺

〒365 0038 埼玉県鴻巣市本町八、二、三一  
電話 ○四八 (五四二) ○二二七

お骨仏の寺

一心寺

〒543 0062 大阪府天王寺区逢阪二、八、六九  
電話 ○六 (六七七二) ○四四四

本應寺 隠老

熊谷靖彦

〒849 1411 綾野市塩田町馬場下甲六六二、一

# 暑中お見舞申し上げます

平成二十六年

九品阿彌陀如来

淨眞寺

〒158-0083 世田谷区奥沢七、四一、三  
住職 清水英碩

願行寺

佐藤成順

〒140-0004 品川区南品川二、一、一二

森巖寺

加藤昌康

〒155-0032 世田谷区代沢三、二七、一

花巻 廣隆寺

谷地玄雅

東日本大震災の早期復興を念じます。

大吉寺住職

成田昌憲

〒154-0017 世田谷区世田谷四、七、九

鎌倉大仏殿

高德院

〒248-0016 鎌倉市長谷四、一、二八  
電話 ○四六七(二三) 〇七〇三  
FAX ○四六七(二三) 五〇五一

定義如来

極楽山 西方寺

〒989-3213 仙台市青葉台大倉字上下一  
電話 ○一一(九四) 一一〇一一  
HomePage: <http://www.johg.or.jp/>  
E-mail: [saihouji@johg.or.jp](mailto:saihouji@johg.or.jp)

梅窓院 住職

中島真成

東京都港区南青山  
2-26-38  
電話 03 (3404) 8447  
ホームページ  
<http://www.baisouin.or.jp>

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四、一二、八

岩淵

天王山 正光寺

東京都北区岩淵町三十二、十一



「のらくろ寺」・「のらくろ和尚」  
住職 飯島英徳

北海道室蘭市  
満岡寺・善行寺  
(0143) 22-4677・44-2695

光取寺

大室了皓

〒141-0021 東京都品川区上大崎一、五、一〇  
電話 ○三(三四四) 八三八四



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。  
どしどし編集部にお寄せ下さい。

# 浄土誌上句会



●坂

〔特選〕  
衆目を集めて林檎坂転ぶ

石原 新

縁日などで道に並んでいる屋台と見ても、  
買って帰る途中と見てもよいだろう。何かで  
転げ出した林檎が坂を転がって行く。「衆目  
を集めて」はやや大袈裟な表現のように思う  
が、これが一句を面白くした。

〔佳作〕夏燕斜めに飛んで坂の町

相沢登美雄

単足袋すたすたとゆく神楽坂

木村 恵子

急坂をランドセルゆく桜東風

井村 善也

●雲

〔特選〕  
夏雲の俄かに暗し見ら走る

森 懐人

黒い雲がにわかに広がって来て、あたりは  
暗くなってきた。多分夕立が来る前の状態だ  
ろう。遊んでいる子供達にも、その急な変化

は分かるのだろう。「またあした」などと言  
って散り散に別れて行く。

〈佳作〉

雲の影置きし青田に老い二人

佐藤 雅子

雲梯を渡る速さや夏来たる

今泉 太一

雲海を染めゆく日の出富士の峰

井村 善也

●自由題

〈特選〉

蛸壺が住みかの猫や浜の春

山口 信子

蛸壺は牡蛎殻などを落としてきれいにす  
と、口を一方方向に向けて積んでおく。一つだ  
け転がっているのもある。そのどれでもよい  
が猫が住みついているのだ。海岸だから食糧  
に困ることもなからう。

〈佳作〉

球音にビールの売り子ふり返る

戸崎 桂一

初蝶に視線こらせど見失う

中村 真一

大鳥居常若願い櫓差す

黄瀬 鴻



# 円卓自由題

兼題  
浄土誌上句会の  
お知らせ

誌上句会〔編集部選〕

■坂

わけありて坂下闇の廻り道  
化粧坂通う人なし著我の花  
過疎の街日本一の坂心淋し  
サルビアの続く坂道影ふたつ  
坂道を転がり来たり山背風  
目に優し坂の途中の水旗  
上り坂はじまる家の濃紫陽花

■雲

里育ち寺で味継ぐ海雲和え  
泰然と雲をかぶりて夏木立  
雲沸いて幟に子らの声降らす

森 懐人

當間あさ子

飯島英徳

早乙女喜栄子

佐藤雅子

大木悠太

小林苑を

當間あさ子

早乙女喜栄子

佐藤雅子

締切・二〇一四年八月二十日

発表・『浄土』二〇一四年十月号

選者・増田河郎子〔南風〕主宰

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0001 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内  
月刊『浄土』誌上句会係

水の中なる夏空に雲動く

棚田から棚田へ歩く雲の峰

初夏や雲形定規のある教室

人生は茶色の小瓶雲の峯

はたた神蓋が空かない雲丹の瓶

■自由題

藤棚にかすかに届く笛太鼓

麦秋を来て石段の昏さかな

堂の隅箒の先に上げ雲雀

五月雨やジャスミン朽ちてなまめかし

鯉に餌与えて寺は夏めくや

足場組む六人夏の匂ひして

友と酌むほかは客無き樺の忌

夏の夜の天地無用の大荷物

大菩薩峠全巻夏の宿

水無月の黒猫眠りながら笑う

秩父みな青水無月の青のなか

鈴木涼子

鎌田幹彦

相田りん

吉池那津子

日高登志子

森 懐人

横山波留

當間あさ子

早乙女喜栄子

佐藤雅子

内藤隼人

山根幸治

柴田紀道

秋山富美子

金井 横

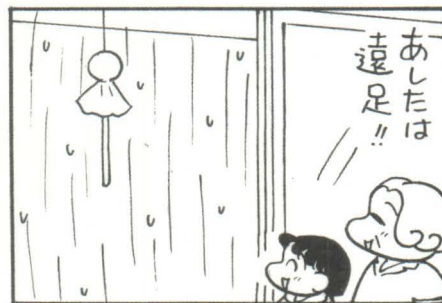
市川美由子

# さっちゃんねネッ

かまち♡ひろう



かまちひろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)



## 編集後記

夏の光に焦土のにおい駆け巡る 岱潤

少し前『みやぎ中央新聞』で、「怒りのマネージメント術」という安藤俊介さんの六回にわたる連載があった。大変おもしろい連載で、寺の念仏会でも紹介させていただいた。怒りの感情をいかにコントロールするかが、私たちの幸せにも関わってくるというものだ。怒りというと、三大煩惱の一つで、それ自体が悪いことであり、してはならないことと考えてきた。しかしよくよく考えてみれば、この三大煩惱は貪欲も愚痴もひっくり返るため、どんなになくそうとしてもなくならないものばかりだ。特に怒りなどは抑え

ようとしたところで余計わき上がったく感情かもしれない。だからコントロールが必要になってくる。そして冷静に怒るべきことと、怒る必要のないことを分けることが肝心だ。その境界線を安藤さんは後悔するかもしれないかだと言っている。後で怒らなければよかったと思うのなら、初めから怒るなということだ。

ただ最近の政治の世界、怒らなければならぬことが多いように思う。革新だ保守だ、左翼だ右翼だとかいうことではなく、政治の基本的ルール、戦後多くの犠牲から学び作り上げてきた、日本の民主主義の基本を壊してしまうほどの暴挙が、国の最高権力者たちによってなされ

ようとしているように見えて仕方がない。沖縄を、広島、長崎、そして東京、名古屋、大阪といった都市を焦土と化した戦争の、六十九回目の終戦の日をまた迎える。

(長)

編集チーフ  
編集スタッフ

長谷川岱潤  
斎藤晃道  
佐山哲郎  
青木照憲  
村田洋一

## 浄土

八十巻七・八月号

頒価六百元

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十六年六月二十日  
発行 平成二十六年七月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了悟

印刷所 株式会社 シーティリー

〒一〇五・〇一一

東京都港区芝公園四・七、四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三・五七八・六九四七  
FAX 〇三・五七八・七〇三六  
振替 〇〇・八〇・八二八七

## 雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員のの方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)  
蔵谷勝正(目黒・祐天寺)  
魚尾孝久(三島・願成寺)  
大江田博導(仙台・西方寺)  
加藤昌康(下北沢・森厳寺)  
加藤亮哉(五反田・専修寺)  
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)  
桑原恒久(川越・蓮馨寺)  
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)  
佐藤成順(品川・願行寺)  
佐藤良純(小石川・光圓寺)  
東海林良雲(塩釜・雲上寺)  
須藤隆仙(函館・称名寺)  
高口恭行(大阪・一心寺)  
田中光成(町田・養運寺)  
中島真成(青山・梅窓院)  
中村康雅(清水・実相寺)  
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)  
野上智徳(静岡・宝台院)  
藤田得三(鴻巣・勝願寺)  
堀田卓三(静岡・華陽院)  
本多義敬(両国・回向院)  
真野龍海(大本山清浄華院)  
脳 博之(網代・教安寺)  
水科善隆(長野・寛慶寺)  
宮林昭彦(大本山光明寺)

(敬称略・五十音順)

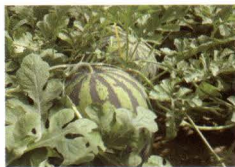
ホームページ <http://jodo.ne.jp>

メールアドレス [hounen@jodo.ne.jp](mailto:hounen@jodo.ne.jp)

# 泰雲の

文と写真

## 美味探訪



浄土真宗東京東本願寺派  
光徳寺・平井泰雲尼  
茶道歴30年

## 涼一味・鳥取の『大栄西瓜』

日ごとに暑さがますます季節のもてなしは、涼一味につきます。

縁あって鳥取県に親戚ができたことで、毎年夏の訪れとともに世界でも有名ブランドになった鳥取の見事な『大栄西瓜』が届き、暑気払いをさせていただきます。

今回はこの『大栄西瓜』のご紹介です。

全国西瓜生産量4位の鳥取県は、大山（だいせん）の山麓に広がる火山灰土壌「黒ほく」の大地で、太陽の恵みと大山の雪解け水をいっぱいに浴びて育った甘い瑞瑞しい西瓜がたくさん生産されています。その中でも北栄町（旧大栄町）の『大栄スイカ』は、寒暖の差の大きな気候により糖度12度以上と大変甘く、歯ざわりがシャキシャキした大玉が特長です。

西瓜が明治40年からこの地で栽培されて100数年になり、昭和48年に『大栄西瓜』のブランド名が生まれました。

西瓜はトマトよりリコピンの含有量が多く、糖度の高さのわりにはカロリーが野菜と同じ、その上カリウムを多いので、美容と健康の果物として注目されているそうです。

食べ頃は6月の中旬～7月中旬過ぎで、価格は大きさによって異なりますが、中玉3,000円前後、特大玉5,000円前後。注文時、確認をお願いします。

今夏は是非、『大栄西瓜』の甘さ・瑞瑞しさを堪能してください。

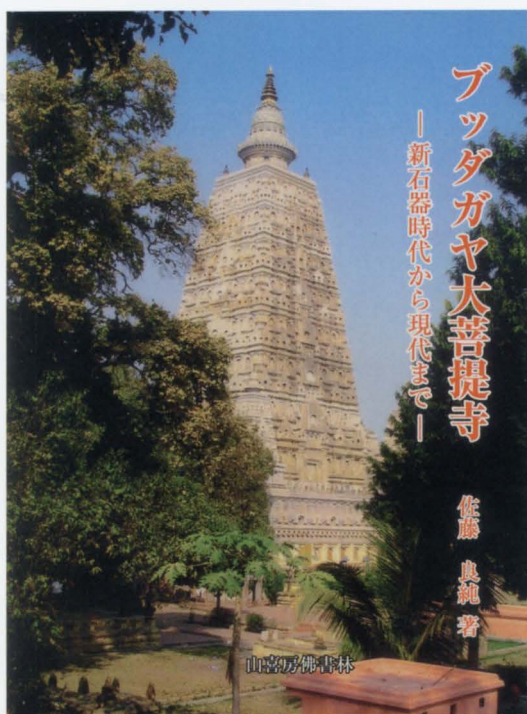


JA鳥取中央北栄営農センター 鳥取県東伯郡北栄町妻波1725-2  
Tel 0858-49-1147 休日 土曜日 営業時間 8:00～16:00  
フルーツ平田 鳥取県鳥取市栄町104  
Tel 0857-22-4714 休日 年中無休(1月1日～3日休み)  
営業時間 9:00～18:00

大好評、在庫僅少！

# ブツダガヤ 大菩提寺

佐藤良純 著



ブツダガヤ大菩提寺

—新石器時代から現代まで—

佐藤良純 著

ブツダガヤの歴史  
全貌が明らかに！

山喜房佛書林

本体2000円